

我孫子市民図書館 秋のたより

発行 我孫子市民図書館
〒270-1147
我孫子市若松26の4
電話04-7184-1110

本に
恋する
季節です！



2017・第71回
読書週間
10/27～11/9

デイジー（DAISY）録音図書をご存知ですか？

デイジー録音図書とは？

視覚障害者や普通の印刷物を読むことが困難な人々のために、図書等を朗読し、録音したデジタル図書です。長時間の収録が可能で検索ができ便利です。



*ご利用になりたい方は、まずは図書館までご連絡ください。

デイジー録音図書の貸出

我孫子市民図書館作成のデイジー録音図書を所蔵しています（音訳・編集はボランティア団体「音訳ボランティア我孫子」）。所蔵していないものは全国の図書館から取り寄せることもできます。視覚障害者（1～6級）の方には郵送で貸し出します。費用は無料です。

録音図書を聞くには、専用の再生機（右写真）が必要です。市販のMP3対応のプレイヤーでも聞くことができます。



プレクストーク PTN2

すべての人にすべての本を



我孫子市民図書館では、障がい等の理由により、通常の活字による読書が困難な方に対して、ハンディキャップサービスをおこなっています。

大活字本の貸出

どなたでもご利用できます。



内容はそのままに、大きな活字で印刷した本です。

通常の単行本は、文字サイズが8～10ポイントに対して、大活字本は、14～26ポイントとなっています。

対面朗読サービス

目が不自由等の理由で本を読むことが困難な方に、図書館の市民スタッフが、専用の読書室にて、ご希望の本・雑誌・新聞などを1対1で朗読します。アビスタ本館と布佐分館にておこなっています。



*ご利用には申込が必要です。

“我孫子”が登場する小説！！

『白磁の人』 江宮隆之／著 河出書房新社



山梨県出身の浅川伯教・巧兄弟をご存じの方は、あまりいないだろう。我孫子ゆかりの先人柳宗悦の民藝運動に、大きな影響を与えた兄弟である。

著者は柳の書生だったとき、書齋で浅川巧の写真に出会い、その柔和で温かな表情にとてつもなくひきつけられる。物語は、兄弟の活動（職業）や我孫子が登場する場面、柳に与えた影響など淡々と描かれていく。小説の形をとっているが、著者の巧への尊敬や愛情にあふれた「浅川巧を知る旅の記録」といってもよい。“我孫子”の

登場には親しみを感ぜずにはいられない。読者の心に深く染み入る、忘れられない1冊である。

<探してみよう“我孫子”が登場する小説>

社会派小説の名匠・直木賞作家高村薫は、「合田雄一郎刑事」シリーズの中の1冊、『冷血』（上・下／毎日新聞社）で、天王台地区を登場させている。

* 対面朗読サービス利用者の声

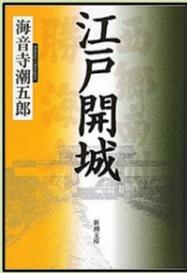
自分で読んでいた時は、活字を読むことに必死になっていたのですが、初めて朗読してもらった時は感動しました。以前に読んだことのある本も、他の人に朗読してもらおうと印象が異なり、また理解が深まるように感じます。



大政奉還から150年

～約270年続いた徳川幕府の終焉～

『江戸開城』 海音寺潮五郎／著 新潮社



尊王攘夷の嵐が吹き荒れる幕末動乱の時代に、「江戸城無血開城」という奇跡の一幕はどのようになすとげられたのか。西郷隆盛の言動を通して、その舞台裏を克明に描き出す本作は、西郷が大久保利通に宛てた1通の書状から始まる。「徳川慶喜の命乞いはもってのほか。極刑をもってしかるべし。」という激烈な内容であった。薩摩藩では、温厚な人物として知られる西郷が、なぜこのような激しい感情を見せたのか…。

痛みのない革命を認めないとする新政府方の西郷に対して、交渉にあたったのは、あくまでも平和的に政治権力の譲渡を計ろうとする旧幕府方の勝海舟。旧知の仲でありながら立場上対立する二人を中心に、複雑に絡み合った人間模様が描き出される。歴史的考証にも定評のある著者が、約270年続いた江戸幕府の終焉を記した傑作長編小説である。

『天璋院篤姫』 上・下巻 宮尾 登美子／著 講談社



「薩摩の分家の娘が、天下の御台所(第13代将軍家定の正室)になる。」それを人は類まれなる出世だと言うけれど、その実は養父の政略と体の弱い夫との短い結婚生活であった。大奥が継嗣問題や皇女和宮の降嫁で揺れる一方、表では大政奉還、江戸城明け渡しと徳川幕府は傾いていく。

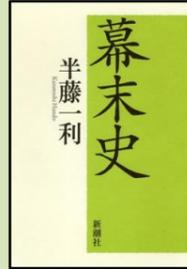
寂しさや嫉妬といった負の感情を押し殺し、強くならざるを得なかった篤姫の生涯が淡々と、しかしながら緻密に描かれている。篤姫は、一人の女性としては決して幸福とは言えないが、大御台所として徳川家の大奥を守ろうとした。その誇り高く毅然とした姿に心が打たれる。

『その時歴史が動いた31』 NHK取材班／編 KTC中央出版



“歴史が動く”その時を探るNHKの番組を書籍化したシリーズの31巻。時は幕末、安泰と思われていた徳川時代に陰りが訪れる。毎日のように何かが起こっていたこの時代の出来事を、“歴史が動いた”瞬間をとらえるべく調査し解き明かしていく。その史実は、もはや会うことのできない歴史上の人物を身近に感じさせる。「勝海舟 江戸城無血開城はなぜ実現したか」ほか4編を収録。

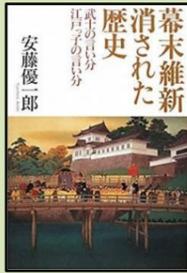
『幕末史』 半藤一利／著 新潮社



視点が変わると、見える風景ががらりと変わってくるのが歴史の面白さのひとつである。例えば、地方からと中央から、勝者の立場と敗者の立場のように。では、越後長岡藩をルーツに持つ作家、半藤一利が幕末の日本を見たら、そこにはどのような光景が広がるのだろうか。

1853年(嘉永6年)のペリー来航から明治元元を経て、西南戦争の傷跡残る1878年(明治11年)までの25年間を、軽妙な語り口で綴った半藤流幕末史である。2008年に慶應丸の内シティキャンパスで、12回にわたって行われた特別講義を1冊にまとめたもの。学生に戻った気分で、ご一読を。

『幕末維新 消された歴史』 安藤 優一郎／著 日本経済新聞出版社



幕末から明治へと変わるとき、それは、徳川幕府のもと、安穩としていた人々の日常が、少しずつ、確かな足音とともに変化していった時代。ペリー来航、新撰組、坂本龍馬、薩長同盟、大政奉還、王政復古、戊申戦争、明治維新、様々な歴史的出来事は勝者と敗者を生む。

この本は、幕末の出来事を書状や日記から再検証し、表舞台から姿を消した人々や出来事の真実を探る。

『最後の将軍』 司馬遼太郎／著 文藝春秋



江戸幕府最後の将軍、15代徳川慶喜の生涯を描く。

ペリー来航以来、朝廷と幕府との間の緊張は高まり、一触即発の状態が続く中、周囲の思惑や期待によって、半ば強制的に時代の中心に立たされた慶喜。にも拘わらず、常に自分自身を信じて、重大な決断を下していく。その結果、幕末動乱期の歴史は大きく動き、彼がいかに頭脳明晰で、先見の明を持つ人物であるかを浮き彫りにしていく。

しかし、その姿はひどく孤独であった。幾人もの謀臣の死を見送る姿、二条城での任を終え京都を逃れ去る姿には悲哀が感じられ、読んでいて胸が締め付けられる。大政奉還で政権を返上し、江戸城を明け渡して、江戸幕府の幕引きを終える。約1年という短い将軍職在位期間であった。その才能を思うと、「幕末ではなく別の時代に生まれていたら、もっと活躍していたのでは…」と惜しまずにはいられない。

年表

— 大政奉還前後の主な出来事 —

慶応二年(一八六六)

七月二十日

第十四代将軍徳川家茂没

十二月五日

徳川慶喜第十五代将軍職就任

十二月二五日

孝明天皇崩御

慶応三年(一八六七)

一月九日

睦仁親王(明治天皇) 16歳で即位

六月二二日

土佐藩、薩摩藩で薩土同盟結ぶ

九月二一日

慶喜二条城に移る

十月三日

土佐藩、大政奉還建白書提出

十月十二日

大政奉還の建白を採用

十月十三日

慶喜は諸藩の重臣を二条城大広間に集め、大政奉還の意思を伝える

十月十四日

大政奉還の上表提出

十月十五日

大政奉還を勅許

十一月十五日

坂本龍馬暗殺

十二月九日

王政復古に関する御前会議

十二月十二日

慶喜将軍職辞職

- 参考文献
- 『日本史年表 増補版』
- 『歴史学研究会／編 岩波書店』
- 『江戸時代265年ニューズ事典』
- 山本博文／監修 柏書房
- ほか

このマークは、大政奉還150周年記念プロジェクト(東京都)のシンボルマークです。

